

台湾に行ってきた。私よりも農場従業員が二人が視察旅行に台湾訪問を熱望したので。

負の連鎖を断ち切る

今回は新工場ができたというので、穀物乾燥機メーカー・静岡製機(株)の協力会社でもある台中にある三久SUNUCEを再び訪問した。急ぎよ、東京に住む私の甥っ子たちも参加することになり、飛行機は成田発桃園着のスクート航空を使った。行きは1万円だが帰りは5万円のおよくわからないチケットだった……。

15歳の甥っ子は中学を卒業して高専に合格した。18歳の甥っ子は私立には受かったが、第一希望の国立大学に受からなかった。今だから笑い話でいえるが、私の時と同じだ。

私は国立大学受験に失敗して望まない私立に行くことになった。だが、当時の天皇誕生日の前日4月28日まで2週間通ったが、今でいう完全に燃え尽き症候群になった。ちよつと前の表現だと頭の中は完璧な5月病だった。私のころはそんな言葉も表現もなかったし、誰も心理的なフォローがなかったのが辛かった。

今考えるとそんな心理戦も含めての受験戦争だと理解できるのだが、親たちは「またがんばれ！」くらいに簡単に言う。甥っ子たちとは同じ

DNAを持つ間柄だ、精神的フォローも含め今回、台湾訪問に誘ったのだ。まっ、負の連鎖はどこかで、何かを使っ

て、多くは愛と時間とお金を使って断ち切る必要がある。あく私はなんてカッコイイおじさんなんでしょうか。

台北到着後はすぐ夕食に出かけることになった。ホテルの周りには飲食店がたくさんあったのでまず、あん入り小判焼きを一個食べ、隣の店では肉汁たっぷりの肉まんを一個食べ、メインディッシュは豚肉、鶏肉、ソーセージ丼で、ホテルに帰ったところそこで事件発生。15歳の甥っ子が財布をどこかで失くしてしまっ

嘘は止めさせた

その後、近くの警察署に行き英語と台湾語のレポートを作ってもらったが、担当の30歳くらいのお巡りさんとは普通に日本語で対応することができた。

レポートを作る時に「財布自体の値段は？」と聞かれ、15歳の甥っ子

台湾に行ってきた

Vol.121



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

は母親(私の妹)からは保険金を多くせしめようと「8000……」と言おうとしたが嘘は止めさせた。本当に見つかった時に問題になるから、と言ったら甥っ子は「200円」と言うとお巡りさんが「ぶっ」と笑い声を吹く。後からホテルで聞くと日本人のお客さんは一週間に一組くらいの頻度で財布を失くすようです、とのことだった。

翌日は台北から高鐵と呼

ばれる白とオレンジのストライプが入ったほぼほぼ700系の新幹線で台中に向かった。所要時間はちょうど一時間で台中の中央改札では三久のプロの独身32歳のフォレスト岡田さんが我々を待っていてくれた。

なんでも岡田准一に似てるというられるので、日本名は岡田にしているとのこと。確かに似ているしいい男なのにプロの独身か……もったいない。他の三久社員もそうだが、英語ができるのは当たり前前、プラス第二外国語が営業職には求められるそう。彼とは出発の前からラインを使ってスケジュールを確認していた。きつとすごいランチになるんだろなうと思つたら、それ以上のド級 (Dreadnought・すごい) のもてなしを受けた。一番感激したのは初めて本格的な台湾料理を食べた甥っ子たちだ。

台湾ではコメ農家は乾燥機を持たない

その後、三久の乾燥機を使っている集荷業者に向かった。台湾ではコメ農家は乾燥機を持たず、精米工場や穀物集荷業者が収穫後の乾燥作業を行なうことになる。この集荷業者には年間100日稼働で20年使った300石(30t)の三久の乾燥機があった。コントローパネルは見覚

えのある日本の静岡製機製だ。

静岡製機は三久から150石以上の乾燥機の枠を三久から輸入して国内販売し、三久はコントローパネル類を静岡製機から輸入する関係が40年以上も続けている信頼関係があるようだ。

そのような集荷業者が台中だけでも7社ほどある。各集荷業者は100から1000程度のコメ農家と契約する。そこで、かなり儲かっていると説明を受けたこの集荷業者の親方にこの様に聞いてみた。「契約しているコメ農家さんの移動は年間どのくらいですか?」。彼は「年間数件かな、あまり移動はないよ」。私はもしかしてと思い「他の業者と乾燥する価格を話し合うことはありますか?」。価格破りする業者はいますか?と聞いた。「年に一度は他の業者と集まる。もし価格破りしたらその業者はみんなからハジキ者扱いされるよ、ハツ、ハツ、ハツ」

モミ殻燃料の機種が販売の70%を占める

バスは三久の新工場に向かった。

できたてホヤホヤの母屋だ。物品の製造は始まったばかりで人もまばらだったが、これが本格的に稼働すると現在の数倍の生産になるのだろう。作業クレーンには日本でもおなじみのマークがあった。

安全第一、頼むからここで止めてくれ! 日本では安全・安心は許せても最近では安定!なんて標語がまかり通っている。次は安息?安堵?安ぼんたん、かもね。はいみなさん、安コール!

最後に本社に向かい、表玄関には「西南農場、宮井社長」の文字が。やはり何度見ても照れますね。

林社長は3・11の時に当時のエバー航空の会長と同じ金額の個人献金をしていただいた方だ。金額は微生物の突然変異ができる確率の数字を想像してください、通貨はUSDとだけお知らせします。

まずは中国語で「林社長、今回はありがとうございます」と伝え、通訳のフォレスト岡田さんを通して日本語で、バスの手配や6名の視察者受け入れやド級のランチに感謝を述べた。社長の説明では三久の乾燥機は現在ヨーロッパ、メキシコ、南米、アフリカなどの世界中のコメの産地に輸出しているようだ。また現在の主力の燃料は軽油(灯油ではない)からモミ殻を燃料にする機種に

なり、販売の70%を占めるようになっていたようだ。驚いたのはモミ殻燃料にすることによって化石燃料との差額でコメの販売金額を超えるというから驚きである。

自分の所属する民族が歩んできた道を知る旅

台湾視察は単なる旅ではなく、自分の所属する民族が歩んできた道を知る旅でもある。旅先で知り合った年配の方たちには必ずこのように聞く。「昔、日本兵はお父さんや、お母さんに悪いことをしましたか?」。今まで20名以上に同じ質問をしたがいつも同じ答えだ。「ない」。不思議なのは答えまでの間の取り方が全員同じなのだ。

ということとは嘘や遠慮をしているのではないと思うが、少なくとも自分たちがメディアや韓国発、中国発の情報とは明らかに相違があるのはなぜだろうか。ある老人はこう言った。「一番恐ろしかったのは竹刀を持った小学校の女の先生(日本人)だった」

そういうえば、会食中になぜミヤイさんは英語ができるのですか?とたいてい上手くもないのに脇の下をくすぐられる質問を受けた。

私はこう答えた。「だって金髪・ブルーアイ大好きですから」